９月２１日（土）猪木先生を囲む非公式座談会に向けてのメモ（浦井）

――――――――（猪木先生から頂いたプレゼンテーションのメモ）――――――――

当日の小生のプレゼンテーション（30 分程度）の構成は次の通りです。

二つほど、議論のポイントをお話ししたいと思っています。

１）「知」の倫理学上の分類、位置づけについて

アリストテレスを出発点に、ヴィーコ、ヒュームなどの考えを振り返る

どの「知」を前提とするのか

２）デモクラシーと市場の「問題解決の手段」としての、構造的同型性、相違、欠陥、その最終的なかたち。両者はあくまで手段であり、目的ではない。

当日の議論のきっかけになればと、当方からの追加的コメントのメモを追加させて頂きます。（１）は全ての前提になると思われ、その「前提」をベースに、今日極めて喫緊かつ重大なテーマである（２）「デモクラシーと市場」の問題に至るということで、座談会のタイトルとしては、

「知」の前提から今日の「市場とデモクラシー」に向けて

といった感じに設定させて頂きました。そもそも、この「市場」という問題を通して「民主主義」について考えるというのは、今日の経済学、とりわけ当方のような経済学理論家にとっては、今日社会での市場というものを１つの重要な解決手段と考える限り、自らの学問の意義そのものに関わる重大事項であり、学問全体の、すなわちその学問にコミットしていることの社会的責任が、問われるところのものと考えております。

猪木先生の指摘される「市場とデモクラシーの構造の同型性」という問いは、今日に於けるデモクラシーの問題、議会制民主主義という制度、その機能

不全あるいは行き詰まりといったものと、その同型および相違としての経済学的な社会の構造・機能との間に（相互に補完的な）密接な関連があるものとして、位置付けられる必要があるということを、今日「専門家」としての我々に示唆して下さっているのではないでしょうか。

１つだけ、今日、この「市場と民主主義」の「欠陥」ということにまつわる重要なキーワードとして、「分断」ということが挙げられると思います。この分断ということは、私たち個々人における個々の「自由」ということ、そして社会「全体」の成り立ちとの調和ということにおいて、「経済学」がそもそもの出発点としているアダム・スミスの見えざる手、あるいはハイエク的「自生的秩序」といった、経済学の根幹にもまつわる「自由」という価値観に向けて、むしろその意味を簡単に崩壊させ、放棄させてしまう危険性を孕んだものであるということを、しっかりと考えたいと思います。

以下に、当日に向けた当方覚書を兼ね、猪木先生のお話に関連する形でメモ書き列挙させて頂いております。恐縮ながら語句のみになりますので、適宜、ご放念下さい。

【知】

● プラトン・アリストテレスから始まることは（学知・国家・民主主義といったいかなる意味からも）大事。

● サピエンテイア　スキエンテイア　プルーデンテイア

問い：どの知を前提？　←　「知」はそれが前提とされるなら、あくまでも皆が合意できる「唯一のほんとうの知」でなければならない。

【市場とデモクラシー】

● 同相性：見えざる手（条件：価格所与）　最悪を避ける（条件：平均人）
（欠陥：市場の失敗）　（欠陥：大衆の反逆）
↑　↑
● 相違：スキエンテイアの（市場）支配 → サピエンテイアの（多数）支配
↑
（データ科学・AI 技術）

【問題解決の手段】

「手段であって目的ではない」（極めて重要）　←　けれども現実としては

「お金が目的とされる：新自由主義」（「市場化」が「自由化」と呼ばれて目的化が施されている・実際ここで生じているのは「価値」感の喪失？）

「民主化（制度）が目的とされる：民主主義のための戦争」（ここで生じているのは「非理性」的な命、生存、快・不快等への反射的な対応？）

問い：「誰」の「いかなる」問題なのか？　←　「わたし」たちが「互いにうまくやっていく」ための。（「わたし」たち、「個」々の、目的についての「自由」があり、それでもなお、「全体」としての折り合いが「うまく」つくこと。）　←　通常これは「全」と「個」の問題として絶対的に不調和な調和（和辻が倫理学の根本問題と呼び、経済学がアローの命題と呼ぶ）。その一方で、例えば不確実性下の企業の行動でさえ仮に市場が完備でも一意的にはその目的を（目的関数として株主の予想平均といった形でもうまくいかなかったものを頭から入れない限り）良い形では定められない。そのように、全体の「目的」というものを、個々自由な目的から整合的に定めることは、容易なことで

はない。

↑

こういったことから、いわば今日の「上級国民」といった概念の背景に来るような単純な上下（貴賤というよりも単なる貧富に近い）といったことに見出される、ある種のニヒリズム（虚無主義）的なものは、本来（目的に向けての）「空（虚)」といった場所が持ち得るポジティブな意味を、喪失させてしまうのではないか（無常ということの意義)。　←　（これに向けて）　西谷啓二『空と即』のような相互包括的多元論。あるいは「空」＝「０」に「即」＝「代入」という操作と existential quantifier のビッグバン的なダイナミズム。幅を持った「理性」の行使として深層の真理（アレーテイア）を求める「學」を通じて「生きる」こととの関係。